



大岡昇平集  
9

岩波書店

一九八三年八月二十五日 第一刷発行

定価四五〇〇円

著者 大<sup>おお</sup>岡<sup>おか</sup>昇<sup>しょう</sup>平<sup>へい</sup>

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目十五  
発行者 岩波書店

電話 〇三一二六五二四二二  
振替東京六二六四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

レイテ戦記

死んだ兵士たちに

## 凡 例

一、人名、地名は原則として原音によったが、すでに当時の各種文献に慣用されているものはそれに従った。〔例〕ルーズベルト

二、日付、部隊号は和数字表記、日数、数量は数字列記で表わした。〔例〕八月十五日 歩兵第四十

九聯隊 一六〇日 二三〇機

ただし米軍部隊番号は数字の列記とした。〔例〕米第三〇五連隊

三、日米両軍を区別するために、米軍は原則として上に「米」をつけた。〔例〕米第七師団

ただし継続的に現われ、混乱のおそれのない場合は省いた。日本軍は「聯隊」、米軍は「連隊」と書いて識別しやすいようにした。

四、日付、時間は当時日本軍が使用したもの(内地標準時間)である。これはアメリカ軍使用の時間(ワシントン時間マイナス9)と一致し、現地時間は一時間おそくなっている。なお時間は次のように表わした。〔例〕〇一三〇〥午前一時三十分

五、引用文献中の小活字は著者の注である。

本文図版中の符号、記号

〈符号〉

A 軍、野砲兵聯隊  
Ab 砲兵大隊  
As 独立砲兵聯隊  
B 旅団  
Bs 独立混成旅団  
D 師団  
FA 航空軍  
FL 野戦病院  
i 歩兵聯隊  
ibs 独立歩兵大隊  
is 独立歩兵聯隊  
K 騎兵聯隊  
KD 騎兵師団  
P 工兵聯隊

SO 搜索聯隊

T 輜重兵聯隊

I II III 大隊番号

□ 内は米軍部隊

〈記号〉

♫ 軍司令部

♫ 師団司令部

☆ 旅団司令部

♫ 聯隊本部

♫ 大隊本部

♫ 砲兵陣地

♫ 砲兵観測所

井 飛行場

—×— 師団戦闘地境

—××— 軍戦闘地境

# 目次

## 凡例

一	第十六師団 昭和十九年四月五日	2
二	ゲリラ	18
三	マツカーサー	30
四	海軍	38
五	陸軍	49
六	上陸 十月十七日—二十日	60
七	第三十五軍	85
八	抵抗 十月二十一日—二十五日	100
九	海戦 十月二十四日—二十六日	160
十	神風	257



十一	カリガラまで	十月二十六日—十一月二日	286
十二	第一師団	.....	334
十三	リモン峠	十一月三日—十日	363
十四	軍旗	十一月十一日—十五日	423
十五	第二十六師団	.....	459
十六	多号作戦	.....	464
十七	脊梁山脈	.....	492
十八	死の谷	十一月十六日—十二月七日	523
	作者の言葉	.....	623

付 図

- 1 南西太平洋
- 2 フィリピン
- 3 レイテ島

レイテ戦記  
(上)

一 第十六師団 昭和十九年四月五日

比島派遣第十四軍隷下の第十六師団が、レイテ島進出の命令に接したのは、昭和十九年四月五日であった。師団長陸軍中将牧野四郎は鹿児島県日置郡出身、陸士二六期、第二十九聯隊長、第五軍(牡丹江)参謀長などを勤めたことがあったが、その後は主に教育総監部系統の経歴をたどり、昭和十七年十二月以降は、陸軍予科士官学校長であった。十九年戦局逼迫に伴い、三月一日十六師団長を拝命、十二日ルソン島ロスバニヨスの師団司令部に着任したばかりであった。

十六師団(通称垣)は、戦争初期、バターン半島の苦しい攻略戦を受け持たされた不運な師団であった。第九聯隊(京都)、第二十聯隊(福知山)、第三十三聯隊(津)の歩兵三個聯隊を基幹とし、バターン戦終了後もフィリピンに止まって、ルソン島中部及び南部の警備に任じていた。

牧野が着任した昭和十九年三月には、師団司令部はラグナ湖南岸ロスバニヨスにあり、九聯隊は東南方ナガ、レガスピー方面、三十三聯隊はルソン島中部アンヘレス、サンフェルナンド方面にあった。二十聯隊は前年十月より、ピサヤ諸島警備の独立混成第三十三旅団に配属せられ(旅団長見城五八郎少将のみタクロバンに進出)、レイテ、サマール、ネグロス諸島のゲリラ討伐を行っていた。

牧野のロスバニヨス着任の日、衛生中隊が付近山中でゲリラに襲われ、千々岩中隊長以下、将校二、兵一二が戦死した。直ちに司令部直轄の二個小隊を派遣して討伐し、十五日までに地区内の無線機三基を掌握した。米軍将校フィリップ中佐を射殺した。

フィリップ中佐はアツツ島攻略軍に加わった歴戦の将校で、前年ひそかにルソン島南部に上陸し、拠点を作って三カ月以上、米潜水艦と無電で通報していたといわれる。ゲリラの内応によって捉えられたのであった。「まことにこれわが比島軍の恥なり」と牧野は書いた。

牧野中将には三月一日から九月十九日までの陣中日誌が残っている。作戰要務令に定められた「陣中日誌」ではなく、私物の日記でたまたま内地に帰る参謀に託されたものであった。中将の温厚篤実な人柄が表われているだけでなく、十六師団の動向を逐日知ることが出来る貴重な文献である。

師団主力がレイテ島進出の命令を受ける二日前の四月三日、マニラで黒田重徳第十四軍司令官統裁の下に、比島軍全般の兵力配置を決定したばかりであった。九聯隊の諸隊巡視のため、五泊の予定をもって、五日早朝特別列車でロスバニヨスを出発、夕刻七時にナガに着いた。聯隊本部で神谷聯隊長以下と会食しているところへ、軍司令部から急電があったのである。

これは中南太平洋の戦局急迫に伴い、フィリピン防衛強化による配置変更であった。マーシャル、ギルバート諸島はすでに米軍の手にあり、次にヤップ、パラオをうかがうニミッツ提督の水陸両用部隊の作戦と、ニューギニアの北岸沿いに西進するマッカーサー將軍の西南太平洋軍の攻勢が着々と進行していた。

大本営は二つの路線の結合点をフィリピン南方と予想し、三月二十七日、それまで大本営直轄であった第十四軍を南方総軍(正式呼称「南方軍」)の戦闘序列に入れて、全面的防禦強化を命じたところであった。四月三日の作戦会議はこの命令に対処するためだと察せられるのだが、二日後に急遽十六師団主力にレイテ島進出命令が出たのは、その後南方戦線で起った異変と関係があらう。

三月三十日、三十一日両日、パラオ島が米母艦機、延一、一〇〇機の空襲を受け、艦船二〇隻七八、〇〇〇トン、飛行機二〇三機の損害を受けた。パラオ島はフィリピンの東方一、五〇〇キロ、当時聯合艦隊の根拠地であった。古賀司令長官は前日「武蔵」その他主力艦を出港せしめると共に、自らも空路ミンダナオ島ダバオ基地に逃れようとしたが、折柄その方面を通過した台風に捲き込まれて行方不明、参謀長福留繁中将搭乗機もセブ島南部のゲリラ地区に不時着した。

三十日、西部ニューギニアの補給基地ホーランドディアが、アドミラルティ島の米基地空軍に奇襲され、陸軍第七飛行師団の一三〇機が失われた。当時ニューギニアの防衛軍の主力第十八軍の拠点は、ウエワク、ハンサ湾にあったので、米軍は次に当然その方面に上陸すると予想されていた。その予想を裏切って、一、〇〇〇キロ西方のわが補給基地を襲ったのである。マッカーサー將軍のいわゆる「蛙飛び作戦」であった。

ニューギニア西部の防禦はミンダナオ島ダバオに司令部をおく第二方面軍(阿南惟幾大将)の担当であった。マニラの第十四軍も司令部をパナイ島北岸カピスに進出させることを要求されていた。しかし司令官黒田中將は、パナイ島の匪情險悪、移転に伴う資材運搬の不備等を理由に承知しない。

フィリピンは開戦以来、南方への兵員資材輸送の中継基地にすぎず、飛行場もなければ沿岸防禦施設も全然出来ていなかった。黒田中將は十四軍三代目の司令官で、十八年十月フィリピン独立以来、新政府との政策調整に重点をおいた。フィリピン人の妾を持ち、ラウレル大統領、キリノ、ロハスなど比島側要人とゴルフばかりしている、と非難されるような文治型の軍人であった。大本營の指示に従わず、七千以上ある島に、今から防禦施設をほどこしても間に合わない、敵が上陸したら、マニラ東方山中に退避して持久戦をやるまでだ、と主張していた。第二方面軍がダバオにいるのは、フィリピンの民政上面白くない、出て行ってくれと申し込んで、方面軍參謀を憤激させたという。

三月三十日パラオ島を襲ったニミッツ路線の機動部隊は、その後も西進を続け、スリガオ海峡を指す恐れがあったが、四月二日反転した。

四月三日の作戦會議はこれら状況の説明に終わった。その後牧野中將の行動を見れば、ナガ、レガスピー方面の防禦強化というところだったと思われる。ところで総軍は四月一日、マニラに戦闘司令所を進出させている。十四軍司令部がバナイ島に移転するのがいやなら、マニラにいてもよろしい、そのかわり十六師団主力をレイテ島に進出させろ、との和知參謀副長からの強硬な申入れがあった。

当時、フィリピンにいた日本軍で、正規編成の師団は十六師団だけであった。あとは第三十、三十一、三十二、三十三独立混成旅団が、ルソン島北部、ビサヤ地区、ミンダナオ島の要地に分散警備している。それらはいずれ人員を補充して師団に昇格させる予定であるが、十六師団をレイテ島に取られては、ルソン島の戦闘師団は皆無となる。十四軍にとっては苛酷な処置なのであった。

総軍(通称威)は十五日、統帥を発動する。命令とあっては仕方がない。三十三聯隊だけマニラ周辺に残し、四月十三日より師団司令部は九聯隊と共にレイテ島に移動を開始した。すでに見城旅団の指揮下に入り、セブ、ボホールなどビサヤ諸島の討伐作戦遂行中の二十聯隊は、逐次レイテ島に集結を命じられた。

レイテ島はフィリピン群島のほぼ中央に位置し、太平洋に面している。狭いサンファニコ水道をもつて北東に接するサマール島、南東のディナガット島と共に、レイテ湾を抱き、太平洋を渡ってきた大型船舶に、良き碇泊地を提供している。

北緯一〇度―一一度、東経一二五度で、緯度においてほぼ仏領インドシナ(ヴェトナム)のサイゴンに等しい。冬期は西南太平洋に卓越する貿易風を受けて、中部太平洋から最もフィリピンに近寄りやすい地点である。一五二一年、マゼランの世界一周船団が最初に入ったのは、レイテ湾であった。ニューギニア島北辺に沿って西進するマッカーサーの陸軍が、最も取りつきやすいのはミンダナオ島南部であるが、直接群島中心部のレイテ島を目指す可能性もあると考えられていた。

レイテ島は面積約八、〇〇〇平方キロ、フィリピンで八番目の大きさの島である。南北に長く縦約一八〇キロ、幅は中央部アブグ、バイバイ間のくびれたところで二五キロ、北部タクロバン、パロンボン間の最も広い部分で七〇キロある。

台湾からルソン島を伝わって来る洋上山脈はルソンの南部から紐飾状に分岐してフィリピン群島を

作る。さらに南方にボルネオ、セレベス、ハルマヘラ諸群島に展開する。いわゆる西部太平洋花綵列島である。

レイテ島はそういう分岐山脈の二つによって南北に貫かれている。一つはカリガラ湾の西から南走して島の脊梁を形づくり、アブヨグ、バイバイの線以南で、二つに分岐して、ミンダナオ島の北端と連結する。最高峰で一、四〇〇メートルくらいだが、開析が進行していて、脆い鋸形の頂上と、熱帯性叢林に埋められた深い谷を持っている。火山がその上に噴出して山形を一層複雑にしている。

もう一つの山脈は島の西部をやはり南北に走り、耳のように本島に付着した半島型の山地を作っている。火山はこの地区にはなく、標高二〇〇メートル内外の低い丘陵地帯で、南方の二つの山地半島と共に、あまり戦略的重要性はない。米軍上陸までは頑固なゲリラ地区と考えられていた。レイテ島の日本軍潰滅の後には、この山地中の孤丘カンギボットの周辺に、日本の敗兵一万が集結し、住民の襲撃と飢餓によって斃死した。

この二つの山脈に挟まれた細長い平地が米軍のいわゆる「オルモック回廊」オルモックである。南方のオルモック湾から日本軍のいわゆる「リモン峠」で脊梁山脈を越えるまで、北へだんだん高くなっていく谷間で、リモン峠から先は急坂となってカリガラ湾に降りる。島の東西の交通はこの谷間を北上し、カリガラを迂回してタクロバンに南下する自動車道によって保たれている。米軍上陸後、日本軍の補給作戦が行われたのはこのルートによってであった。

脊梁山脈の東側には、タクロバンの西からサンファニコ水道の北の出口まで、標高一〇〇メートル



ぐらいの丘陵が連なっている。この丘陵地帯と脊梁山脈の間に幅二〇キロの平野が横たわっている。さらに南方のブラウエンまで、海岸に近くカトモン山、十字架山など火山性の小丘があるほかは、一望目をさえぎるものがない平野で、自然の小流、あるいは灌漑用のクリークによって縦横に貫かれている。

レイテ島人口九一万人（一九三九年当時）の大部分はこの平野に住んで、米、甘蔗、トウモロコシを作っていた。平野を米軍はレイテ・ヴァレーと呼び、日本軍はカリガラ平原、あるいはタクロバン平地と呼んだ。米軍がレイテ島に戦略的価値を認めたのは、この平原があるためであった。マニラまで五六〇キロ、ここに飛行場を建設してルソン島攻略の基地としようというのである。

飛行場は海岸地方ではタクロバン、ドラグに、山際にブラウエン北（ブリ）、南（バユグ）、サンパブロ、合計五つあった。うち、戦前からあったのはタクロバンだけで、海軍が管理していた。あとの四つは日本陸軍が十八年末から急遽建設したもので、十月二十日米軍が上陸した時、まだ十分に整備されていなかった。

牧野中将は、四月十三日一〇三〇、タクロバン飛行場に着いて、河添参謀長、北川情報参謀の出迎えを受けた。島の官民代表は官舎の前で出迎えた。官舎はタクロバンの町を見晴す高台の上の、木造二階建てペンキ塗りの建物であった。もとアメリカ人の邸宅で、階上四室階下四室、意外に瀟洒な作りなので、中将は満足を覚えた。マニラに比べると夜は涼しかった。銚田二十聯隊長から贈られた新鮮な鰻の蒲焼を食べ、その夜はよく眠った。